

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520266

研究課題名(和文) 古代和歌における定型と歌体認識の発達過程の研究

研究課題名(英文) A Study on the Recognition of Fixed-form Verses in the Japanese Classic Poetry

研究代表者

佐野 宏 (SANO, HIROSHI)

京都大学・人間・環境学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：50352224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：万葉集の短歌形式の和歌は5単位、7単位の定型句からなるが、しばしば字余り句が認められる。字余り句の生起率は句中の母音首節の位置と相関があり、規則性が認められる。その理由は唱詠法が歌詞に対して独立していたことに起因するとみられ、何らかの旋律にあわせて唱詠していたものと予測される。ところが、萬葉訓詁学の発展によって本文の文字列を訓読する方法と類句による施訓によって、旋律や唱詠法に伴う規則性が動揺しているようにみえることから、本研究では万葉集の諸本での字余り句の悉皆調査を行った。結果として次点期のものほど規則性が強く表れ、仙覚以降にそれが動揺することが知られた。

研究成果の概要(英文)：A lot of poems in Manyoushu, a collection of Japanese Classic Poetry, contain hypermetric phrases and it should be noted that most of these phrases include continuous vowels. As can be inferred from this, people at that time should have considered these poems with hypermetric phrases as a fixed-form verse by slurring the continuous vowels. Investigating variant manuscripts of Manyoshu, we found that at the regulations of hypermetric phrases became less and less strict with time, which might mean that people had forgotten how to chant these poems at some point in time.

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：基盤研究(C)

キーワード：万葉集 字余り 歌経標式 唱詠法

## 1. 研究開始当初の背景

古代和歌は、五単位・七単位の短長句からなる文体様式を有するが、萬葉集の字余り研究によって、唱詠上の旋律特徴が字余り句の分布に関係することが明らかにされている。

萬葉集の字余り句は、その殆どが余る文字数と同数の母音音節を含むという特徴がある。しかし句中に母音音節を含めば必ず字余り句になるわけではないから、句中に母音音節を含む句が、字余り句になる場合と、そうならない非字余り句になる場合とがある。

字余り句と非字余り句の双方の出現頻度を句毎で観察すると、一首中に濃淡があり、字余り句を生起しやすい句と逆に非字余り句を生起しやすい句に分かれている。

毛利正守氏は、唱詠上の句内属性差と字余り句分布は相関するとみて、さらに句内部の母音音節の位置と字余り句の生起率を分析している。結果、句中に母音音節を含むとその殆どが字余り句になるA群と、逆に多くが非字余り句になるB群の二群に分かれていることを明らかにしている。

一方、萬葉集の訓詁学は、原典への復原を目指して正しい訓を求めてきた。それは漢字本文の文字列を訓むという方法である。

しかしながら、いわゆる萬葉集研究史上の「字余りの法則」と称されるものは、事実上、校訂訓から帰納されたものである。その法則を当て嵌めることで改訓がなされるために、例外的な用例が少なくなる傾向にある。つまり、諸本間の異同での「字余り句の分布傾向」についての検証は充分に行われたとは言えないように思われる。毛利氏が説くような、A群B群の句内属性差による字余り句分布の偏差を諸本で確認する必要があるだろう。

## 2. 研究の目的

申請者の目的は、古代和歌における定型の自覚と歌体認識のあり方を明らかにすることにある。萬葉集の諸本間の字余り分布の位相と、平安勅撰集の諸本間の字余り分布のそれとを並行させることで、萬葉集の下点者らの、萬葉歌に対する「定型の枠組み」に位相を捉え、その史的展開を見定めた上で、歌学における萬葉集享受との関連性を辿り、逆に「定型の枠組み」に対する歌学の内省と分析が、萬葉歌の下点に影響を与えるのか否かを分析する。つまり、古代和歌における歌体認識の発達を、「古歌の歌体」の形成過程を見定めることで相対化しようとするものである。

## 2. 研究の方法

研究計画上の作業は次の5点である。

萬葉集諸本と平安勅撰集(古今・後撰・拾遺)の諸本での字余り句と非字余り句

## の調査

歌学書所引の萬葉歌の該当本善本による字余り句・非字余り句の調査(データとの照合)

萬葉集非仙覚本系統と仙覚本系統の字余り句・非字余り句の分布に関する統計上の分析

歌学書の歌体記事(「歌病」)の内容分析と、「歌病」該当歌を から抽出して、全体に占める割合を諸本間で精査し、統計上に歌学書の記事がどの程度の効力をもつのかを検証する。

古歌に対する歌学書の記事から、歌体としての典型例とそのタイプを抽出する。

以上の作業と検証結果から、萬葉集諸本の訓異同に下点者の「定型の枠組み」が投影されているのか否かを検証する。

## 4. 研究成果

調査の結果、次点期の諸本には、残存している和歌での比較をしてもA群とB群の句内属性差が顕著に観察された。必ずしも全てではないが、漢字本文を「歌にする」ことを主眼として、個々の文字列を意解するようなものが認められ、恐らくは記憶された「古歌」を充てる傾向があるように思われる。この点で「定型の枠組み」に対する自覚と、萬葉歌という古歌の「歌体」認識を反映している可能性がある。ここに仙覚本系統の字余り句分布と非仙覚本系統のそれとを比較すると、仙覚は、一字一音式の仮名表記例を重視する傾向にある。従来から指摘されるように萬葉集内部での実証的な訓詁を志向していることから、現行の校訂本文に近い分布を示す。やや注意せられるのは、次点期諸本と比較して、仙覚が20巻全てを見渡していたということが差を生じた一つの要因として考えられる。

古今和歌集など定家本系統とそれ以外の諸本での字余り句の分布は定家本に特徴がみられ、非常に整った分布を示す。A群B群の枠組みは結果的に維持されているようだが、B群はほとんど機能しておらず(bグループでの字余り自体が極端に少なくなる)諸本では定家本のほうに結句の字余り句が増加する傾向にある。ところが、諸本を見渡すと非定家本では「よみひとしらず」歌ではやや異なるようだが、全体として有意な差とみなすほどではないように思われる。

平安期の勅撰集のありようでは、後撰和歌集がやはり萬葉集の次点期のあり方に近いように観察される。次点期諸本での人麻呂歌集歌だけを取り出すと後撰歌人の古歌意識が投影されているというべきかもしれない。この点でA群B群の枠組みはあるいは後撰集歌人らの時代の一つの姿であった可能性は否定できない。

字余り句とするか否かという、非常に単純な尺度ではあるけれども、萬葉集を中心とし

て諸本間で観察すると、そこには加点者が投影した「古歌」の歌体が観察されるように思われる。これは上述のように字余り句の分布が「古歌」の歌体として自覚されているとみた場合の、一つの仮説ではある。

しかし、A群B群の枠組みは萬葉集諸本においても観察され、その崩壊過程は萬葉訓詁学の発展によって、類句や仮名表記例からの帰納的操作によるとみてまず大きく誤らないように思われる。そしてそのことを萬葉集内部で説くならば、作歌方法としての類句の利用が萬葉時代区分に照らしてその後期に顕著に認められ、すでに崩壊しつつある。

恐らくはA群B群の枠組みは、『歌経標式』に濱成が「近代の歌人」が「音韻」を知らぬと歎いたように、770年代にはすでに「古歌」の記憶という次元にあったものと推定できる。

申請者らの現在の結論は、次のようなものである。

- 1) A群B群の句内属性差は歌詞に対して独立した、唱詠上の旋律を枠組みとして、字余り句の有無に関わらず適用される定型の枠組みであった。
- 2) 唱詠上の枠組みが実態として失われた場合、それは字余り句の分布偏差が文体様式上の枠組みとして再認識される。
- 3) A群B群の句内属性差は、諸本の異同を観察する限り、字余り句という実態を介して、「古歌」の歌体として認識されているらしい。

なお、萬葉集の諸本間での異同と表記分析の過程で、副産物として新たな発見があった。

萬葉集の表記体について、それを構成する用字から分析すると、いずれも「訓字・音仮名・訓仮名」の三種の用字選択によっている。表記体は、三種の組み合わせから7種類に分類されるが、訓仮名だけの表記体は存在しないので、都合6種類になる。結果的に全てを用いるものをデフォルト(既定)として、それぞれに用字法を制限することで表記体が形成されており、それは巻毎に傾向がある。つまり表記体は、デフォルトの用字法に対する制限として記述でき、用字法の集束が、全体として体制的な表記法として一首全体の表記体を形成していると説明することができる。具体的には次のようなことである。

萬葉集における歌の表記様式は徹底した訓字主体表記と徹底した一字一音式の仮名表記を両極として多様である。それは歌一首の表記法が萬葉集全体では定まっていないことを示してもいる。

歌の表記を構成する要素としては、大きく訓字・訓仮名・音仮名の三種類に分けられる。訓仮名だけで歌一首を記した例は集中に見つけにくい。表記を構成する要素の集束として表記様式をみると、

訓字のみ  
訓字と訓仮名  
訓字と音仮名  
訓字・訓仮名・音仮名  
訓仮名・音仮名  
音仮名のみ  
訓仮名のみ(該当例ナシ)

上記のを除くと都合六種類がある。集中の短歌形式四一八六首の表記様式を、これによって分類すると、該当数の多いものの順では次のような結果になる。

訓字のみ( ) 154 首  
訓字と訓仮名( ) 213 首  
訓字と音仮名( ) 1323 首  
訓字・訓仮名・音仮名( ) 1754 首。  
訓仮名と音仮名( ) 201 首。  
音仮名のみ( ) が 541 首。

最も用例数の多い三要素(訓字・訓仮名・音仮名)すべてを用いるものが歌の表記の基本的な「表記体」だとすると、他は用字法上いずれかの要素の制限による相対的な「表記体」として位置づけられる。

歌の表記法を用字法の制限から捉えると、たとえば巻19登載の短歌は殆どが、訓字と音仮名で記されて、訓仮名を排除すること、人麻呂歌集略体歌が音仮名を排除する傾向にあることは対蹠的に位置づけられ、歌一首の「表記体」が支えられている基盤を異にすると考えられる。ここには歌集への登載に際して歌表記の「正書法」が模索された可能性が窺える。

この結果は、萬葉学会、東アジア日本語教育・日本文化研究学会において口頭発表を行った。

当該研究では東日本大震災の影響から種々に計画変更があった。当初計画をできるかぎり遂行したが用例精査に手間取り、論文発表が期間中に果たせなかったため、結果報告は総括的なものとなっているが、具体的な詳細は順次発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 2 件)

佐野宏「萬葉集における歌の「表記体」と用字法について」、第64回萬葉学会全国大会、園田学園女子大学、2011年10月9日

佐野宏「古代日本にける歌の「表記体」について」、東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2011年度 国際学術大会、

INALCO フランス国立東洋言語文化研究  
学院、11月4日

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐野 宏 (SANO, Hiroshi)

京都大学大学院・人間・環境学研究科・准  
教授

研究者番号：50352224

### (2) 研究分担者

寺島修一 (TERASHIMA, Shuichi)

武庫川女子大学・文学部・教授

研究者番号：60290409

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：